

村主幸一著『シェイクスピアと身体 —危機的ローマの舞台化』

人文書院, 2013年 372pp.

服部厚子

20世紀末より今世紀にかけてブームとなっている「身体論」や「身体史」は、本書の著者村主氏も指摘するように従来の「学問のパラダイムの変化を背景にして現れてきた」(17)。学問の対象が知性や理性を優位に置く立場から、それまで抑圧され周辺に置かれてきた身体的なものにも焦点をあてる様になったのである。ヨーロッパ中世は身体を媒介として世界と関わったと考えられているので、中世から近代への過渡期にあるルネサンス演劇の研究が身体論に興味を示すのは当然の成り行きかもしれない。1980年代後半より、アナル派・新歴史主義の隆盛やジェンダー批評・イデオロギー論などの成果発展を踏まえた身体論的なシェイクスピア研究が、散見されるようになってきた。シェイクスピア作品に描かれた身体や身体現象を記号とみなすことによって作品の再解釈を試みる研究、身体表現に社会制度が如何に刻み込まれているかを考察する研究、舞台上の役者の身体と政治体制との関係を論じる研究などが列挙できるが、中には身体やシェイクスピアの境界を越えて、歴史研究や文化研究になってしまっているものもある。

一方アカデミズムにおける演劇研究は、作品の解釈やイメージ研究が先行し、日本においては文学研究の次元に留まっている場合が多かった。パフォーマンスに重点を置いた研究では、テキストの読みがお座なりにされがちでもあった。村主氏はマイケル・ゴールドマンの語る演劇における「過程的」で「累積的」な感覚を大切にし、「身体的な素材が劇の意味と構成と効果にどのように関係しているかに注目する必要がある」(14-15)として、本書がテキストの身体表象の解説を試みる身体論に終わるのを回避し、「演劇における身体的存在

としての人間観」(286)を論じている。

本書が扱っているのは、『タイタス・アンドロニカス』と、プルタークの『対比列伝』から主たるストーリーを借用した『ジュリアス・シーザー』『コロオレーナス』『アントニーとクレオパトラ』の四作品である。いわゆるローマ史劇の精読と身体論研究とが縦糸と横糸となって本書のテキストが編み出されている。村主氏の身体論に関する知的関心の高さと洞察力の鋭さは、各論文に盛り込まれた該博な知識と多岐にわたる引用文献から推察できる。本書では、血を流す身体や漏れる容器としての女性の肉体に関して、従来の研究成果を踏まえながらも、予想もつかない方向に論が展開する。推理小説に見られるレイプ・裏切り・殺傷などの血塗られた事件簿を紐解く驚きと発見が、本書にある。

本書は「プロローグ」において、「シェイクスピア演劇の一つの鉱脈を掘り進める」(9)と語り出される。四作品をそれぞれ二つの章で論じる部分はローマ数字で区切られ、その初めには作品の登場人物とあらすじがつけられ、随所に論点が整理されている。二つの〈幕間〉では関連テーマを『タイタス・アンドロニカス』に戻って論じているが、それは、「シェイクスピアの演劇的な思考方法は、『タイタス・アンドロニカス』がその初期の発現のひとつであり、その鉱脈は彼の劇作家生涯の後期においても変わることがないと主張する」(10)ためであるという。本書は、作品の細部にわたる考察がシェイクスピアの全体像を浮かび上がらせる構成となっており、研究者のみならず、一般読者をも対象としているのである。以下、内容を紹介する。

I「身体的ドラマの開幕」では『タイタス・アンドロニカス』をめぐる論が展開する。一章では、『変身物語』などの古典や図像等における伝統的な英雄レイプの型が、この作品では役者の身体を通して表されると論じられる。欲望を表す比喩の「狩猟」「強姦」「疾走」のイメージの連鎖は、舞台上で「メタファーが現実化してゆく」プロセスとなる(46-49)。しかし、レイプされた女性の動きや表情が先行作品と異なる点に、伝統的なレイプ表象を転覆させる可能性とコミュニケーション手段を奪われたラヴィニアの「表現への意志を持った主体性」(51)がしなやかに読み取られる。

二章は、『変身物語』中の「フィロメラ物語」との比較検討がなされる。身

体が損傷されていくプロセスの認識が加害者と被害者側とで異なることや、プログニの復讐を上回ろうとするタイタスの意図から、村主氏は、暴力を舞台にのせることによって、古典の知識がときに判断を誤らせる可能性があり、「古典文学に依存的な人々の姿勢をこの劇が批判している」(54)と述べる。しかし、タイタスが復讐のために料理人となることでジェンダーの変化を被り、さらに物語の読み聴かせを通してラヴィニアと姉妹関係になることを示して、結末に至るまで「フィロメラ物語」との一貫した類似性が指摘される。

Ⅱ「傷つけと痛み」は『ジュリアス・シーザー』をめぐる論じられる。三章ではシーザーの死体を前にしたブルータスとアントニーの演説に、処刑解剖と神聖解剖の公開解剖学レッスンのサブテキストがそれぞれ大胆かつ慎重に読み取られる。ブルータスは肉体と精神を分けて政局を論じ暗殺を正当化するが、彼の立場は、ヴェサリウス以前の、権威は文書にあるとする処刑解剖学と同じという。他方アントニーは演壇から降り、血を流すシーザーの死体がなお超越的な存在であるかのように、傷口に多くを語らせる。この解剖学レッスンは祝祭的性格を帯びている。シーザーの死体と血を流すキリストのイメージが重なることも指摘される。

四章では、夫ブルータスに、自らを傷つけて秘密の共有を迫ったポーシャの振る舞いが先行研究に反論を加えながら論じられる。当時、女性は漏れる容器としての肉体を持っているとみなされていたが、プルタークの語りにあるポーシャの流血は、シェイクスピアでは言及されない。ポーシャは、妻として同志としての自己証明のために、自己肯定と自己否定を必要とした。痛みは身体を通して知覚され、言葉によって他人に伝えられる。痛みを我慢することは秘密を押し込めることである。村主氏は、ポーシャの傷つけと流血をシーザー殺害やブルータスの肉体軽視と関連させて、そこにジェンダー規範に対する社会批判を読み取り、ブルータスにとっての発憤材料とする解釈を退けている。

Ⅲ「流血と食」では『コリオレーナス』の身体イメージが、ジェイムズ朝イギリスの政治体制や文化史・歴史学・キリスト教神学等の膨大な資料とともに精査され、この作品に聖書のサブテキストが読み取られる。「授乳」「流血」「栄養」「穀物」のイメージの連鎖は、ヴォラムニアの授乳を核として、血まみ

れのコリオレーナスの身体と内面は隠されたままのローマの身体とを、神聖なイメージと悪魔的なイメージとを、それぞれ重ねあわせる。当時はバビロンとバベルがしばしば混同されたという。プロテスタンティズムの解釈者にとって象徴的なバビロンがローマであった事実と、ローマの言語的混乱が「キリストの受肉の反対物としてのバベルの塔の物語を想起させる」(183)という指摘は、ローマの身体に悪魔の身体を発見した村主説をさらに説得力あるものになっている。

コリオレーナスのローマが消化不良を起こしているとする連想は、タイタスの人肉料理を、当時の妊娠・出産の知識との関連で扱う〈幕間その二〉の論考へ導く。都市に滅亡をもたらしたトロイの木馬がウエルギリウスによって「子宮」と呼ばれていたこと、タモーラがローマ入場前に妊娠していたと推定できることから、「妊娠する女のローマ入場を、シェイクスピアがローマ史上の原体験として捉えていた可能性がある」(214)と指摘される。母親に食されることで胎内回帰する息子たちのイメージと、「森の穴」「魔女」「かまど」「練り粉」「妊娠」「出産」のイメージの論理的つながりが証明され、料理人タイタスの復讐の行き当たりばったり説が論駁される。メタファーをつなげて物語を読み込み、結論を導きだす筆致はここでも見事である。

Ⅳ「地理的接近から身体接触へ」では、ルネサンス的な文化背景が後方へ退き、『アントニーとクレオパトラ』における身体の放つメッセージと現前性を創出する演劇的な仕掛け、観客の反応に関心が向けられる。七章では、クレオパトラと出会って身体性を発見した過去の英雄たちと異なり、オクテーヴィアス・シーザーの身体性が希薄であること、彼の派遣する使者たちは、彼の身体性をさらに希薄にすることが説明される。そして、シーザーが凱旋式で「自身の希薄な身体性を女王の濃密な身体性によって演出しようとする」(260)意図と、濃密な身体を持ったアントニーの幻は観客の記憶を利用して語り出されることが示される。

八章では、女王の最期の場面が少年俳優たちのアンサンブルによって構成されていること、つまり、侍女や使者との接近や接触、蛇にかまれて死んだ女のエピソードなどが観客の記憶に蓄積されてドラマが展開することが論じられ

る。女性原理や帝国の表象を援用するのではなく演劇的な仕組みによってクレオパトラは勝者となるという。ここに至り本書の表紙カバーにグイド・カニャッチの「クレオパトラの自害」が用いられている理由が、漸く理解できる。東洋趣味でも夢想的でもない画中のクレオパトラは、官能的ではあるがあどけなさが残り、王冠がなければ侍女たちと区別ができない。この絵はアンサンブル効果についての村主氏の主張を裏書すると同時に、ローマの危機の舞台化を諸テーマのアンサンブルによって明らかにしようとする本書の仕組みを密かに示している。

以上のように本書では「身体史的観念」と「演劇的身体資源」(291)を用いて古典作品を舞台化したシェイクスピアの劇作術が多面的にときに寄り道しながら論じられ、種々の読みの可能性が指摘されている。その論考は詳細で説得力あるにもかかわらず、可能性の多くは指摘に留まり、評者には何処かまどろっこしく感じられた。また、当時の英国社会の不安が投影されているとはいえ、「ローマの危機」とはどのような現象を示し、「その演劇化は身体的なテーマと切り離すことができない」(14)のは何故なのか。これらの疑問は「エビログ」と「あとがき」を読んで解消された。村主氏に拠れば、「生命体としての人間は人生の初めと終わりを持つから人間」なのであり、その否定は「人間がそれ以上のものになろうとすることなのである」(290)。コリオレーナスやシーザーに見られる超人幻想の支配するローマにあって、言語状況は不安定で一方通行ですらあるが、「その悲劇の『中』のファンタジーは、人間性の初めと終わりから切り離されたところに危うい形で成立している」(291)と論じられている。いわゆる身体論とは一線を画している『シェイクスピアと身体』は、そこで示された研究成果を引き継いで今後執筆が待望される物語論の序説であり、効率が優先される現代社会に対する警告を暗に発している。

「蛇のように蛇行」(261)する村主氏のアプローチを辿って、メタファーと抽象度の高い言葉が多用された文章を読み進むことは、評者にとって興味深くも骨が折れる作業であった。身体の有り様について語る言葉が形而上的になるのはやむを得ないとしても、キーワードの一つである「身体性」は定義されておらず捉えがたい。しかし、この語は「希薄な」「濃密な」と形容されている

通り、身体の動態やその波及していくプロセスを包含する言葉であろう。欲望・知覚・感覚が織り込まれたテキストを身体論的に読むとは表層のプロットをただ読み取るのではなく、その下に隠されている事柄に敏感に反応し受け止めることであり、読者の側にも濃密な身体性が要求される。「一生かかってもその一部しか知ることができない」シェイクスピア研究の学問的伝統の上に立ち(338)、それを誠実に受け継ぎながらその先を目指して執筆された本書は、研究内容ばかりか研究姿勢においても知的刺激と示唆に満ちている。